

れない」という、父母を裏切ることとは出来ぬと「上告」を断念したという。

そのため、大村収容所へ送られ調書を取り、理由はともかく送還すると言われた途端、彼の全身は震え「私を死刑場へ送るのか」と、自殺する心算であったという。そのためか担当官の思し召しにより「外国人登録」をし、堂々と娑婆を歩き、人のため、自分のために心身共に努力をしつつ、帰化の申請をし、長女が学校へ入学した頃、名古屋法務局において「帰化」の許可裁定があり、現在に至っているという。

無情の世界

シベリア抑留手記

長野県 片桐 勲

当時のソビエト連邦は共産主義国の総御本家であった。一九一七（大正六）年十月、帝政ロシアを倒して農奴制を解放し、農地は農民のものであると公言、別

名プロレタリア革命ともいわれた社会主義国家が成立してから連邦二十八カ年の歴史が経過した。

一九四五（昭和二十）年九月、満州駐留六〇（七〇）万人の旧日本軍は、理由なき囚われの身としてシベリアの奥地に連行された。唯心を否定し、歴史、思想、風俗、習慣、制度、信仰、伝統、すべて百般を異にする唯物主義の国である。それだけにこの世界には神仏がない、儒教もない、かといって東洋道徳的礼賛に偏った訳でもない。また個人的感情を追憶したものでもない。冷静に客観的立場からみて、心情、そして感性、といったものは一片のかけらもない無情の世界である。

将来限らない可能性を秘めた優秀なる若人が、シベリアの雪原に酷寒と飢えと過酷な強制重労働に耐えながら、お互いに元気な姿で祖国の土を踏み、家族の顔を見るまで頑張ろうと、すさむ心を励ましあった仲間が突然帰らぬ人となる。こんな悲しい憐れなことがあるだろうか。肉親の看護もならず墓参も叶わず、今日に至るも遺骨の収集も果たされず、シベリアの雪原に転がり荒涼異国の凍土の地下に孤独に眠る友をどうし

てやることも出来ない。あのとときだけでもいい、せめて固い白いご飯を腹いっぱいみんなで分けて食べたい思いがした。こんな思いに心が痛む。

このごろ、かつて極限の苦しみに耐え抜いて祖国に帰還されて、戦後日本の復興に貢献された兵籍の友の訃報に次々に接し、またポッカーリと穴のあいた思いに襲われる。遠い黄泉へ旅立つ仲間のありし日の、つらく悲しい虜囚の日々を生き証人として次に記録する。

昭和十六年四月十六日、締結された日ソ中立条約の全文は相互不可侵条約であった。その更新は一年前の昭和二十年四月とすると記されているが、この年の四月五日条約の不更新を一方的に通告してきた。条約有効期間中の昭和二十年八月八日、ソ連は突如不法侵攻を開始したのである。

侵入したソ連軍は、刑務所から出所したばかりの丸坊主の赤ら顔をした軍紀も乱脈な無法者を先兵として乱入し、自動小銃を横殴りに乱射し、婦女を辱めた。そして機動部隊と混成した野獣の如き軍夫は、満州全土の糧秣、満鉄の機関車および施設、民間企業設備、

兵器、弾薬は勿論、食品は砂糖・食油にいたるまで根こそぎ、手を濡らさずにもみるも無惨に収奪した。

これら物資を満鉄輸送力の限界を尽くして満載し、本国に搬入した。古来より中国では北方を鬼門とし、匈奴襲来による略奪を恐れたが、その鬼門からの怒濤の如きソ軍は物資収奪はおろか国取りに侵攻したものである。

当時、陣兵団第六十三師団は、北支より兵団のままソ満国境線に移動した。小生は開魯において演習中、突然四〇度近い高熱に冒され、休養中の昭和二十年七月十四日、当時の満州国首都の新京護衛第三八五連隊加藤大隊に転属、大隊本部付を命ぜられた。

中隊の編成、兵器、被服の受領も終わり、大隊本部に将校、見習士官、同僚下士官と集まったところ、玉音放送があるとの報を受け、ラジオの前に集まったが聴きとることが出来なかった。司令部から日本の無条件降伏と知らされた。張りつめた気力が一遍に崩れ落ちるような虚脱感をどうすることもできなかった。

中隊の将校の中には「我々は最後まで戦う」と怒号

する者、呆然自失放心状態の者、残念無念と号泣する者があり、その夜の新京の街は不穏などよめきの中に満軍の反乱による銃声、満人の略奪暴動らしき喚声は朝まで続いた。

こうしたことが一週間以上も続いた。日本という背景を失った在留邦人の婦人子供を、ソ連兵が北方から追ってくる。満人が柄の長い大鎌を担いで日本人と見れば追う。子供を背負った顔から血を流した婦人が逃げまどう。「助けて下さい」と叫ぶ。実に悲惨である。我が方は武装解除前の隊列にあって、ソ連の警戒兵の嚴重な監視のもとではどうすることもできなかった。

昭和二十年八月二十三日、ソ連軍の命を受け新京市内の学校の庭において屈辱の全面武装解除となる。以後、ソ連正規軍の武装兵の嚴重監視のもとに、満鉄輸送貨車に家畜輸送同様の扱いで一路北上した。その後、黒河を経てソ満国境線であるアムール川に到着したのは九月二十五日である。

文字通り黒龍江の水は青黒く、堤防のない川幅いっぱいには満々と充ちて、水深は黒ずみ不気味さを窺わせ

ている。正に黒龍のごとくうねっていた。野末の草花も散り果て、晩秋を告げていた。河岸に続々と到着する日本兵団は中隊ごとに幕舎を張り、渡河の順序を待つことになった。新京出発時に確保した米も次第に底をつき、全部払って炊き、残余の満州紙幣を集めて満人より野菜を求め、久しぶりに味噌汁を作り、そのときだけの満腹感に体を横にする気にもなった。

北満の果ての秋の落日は早く、日ごとに寒さが増してゆくのが目だって早く感じられた。河越しに見える対岸のソ連は広葉樹の疎林も色あせて、木立の中に点在する赤い屋根に白い壁のコントラストが遠景に美しく見えた。渡河に使用された船は今までに見たことのない木造の大型船で、船の中央両側に水車がついて、エンジンの始動と同時に、後尾のスクリューと共に水車が推進力になる仕掛けになっていた。船は中国製かソ連製か判断ができないほどの代物である。

九月二十六日、空は曇天荒模様、北風が身に沁みる。全員整列の命令がかかる。収奪物資を山と積まれた糧秣の運搬である。南京袋に六〇〜八〇キロの袋詰め

なっている。これを肩から背中に背負って、大型木造船に架けた棧橋が揺れて足元が震える。水辺によって見る黒龍江は河岸から急に深くなり、渦巻く水足は恐ろしいほど早い。黒ずむ水勢は比重が重く、落ちたらそのままのみこまれて一巻の終わりだ。それでも皆で力を合わせて命懸けで運んだ。

やり場のない悔しさは耐え難い。しかし丸腰の日本兵の現在、下手な抵抗は被害が大きいの。行く先不安の中にじっと我慢の連続より仕方がなかった。ソ連軍の兵士が突然発砲し威嚇する。戦勝国のプライドも品位もない。無頼の徒輩としか見えなかった。人それぞれに複雑な気持ちのまま全員船に乗り終え、二度と来ることのない北満を振り返り、さよならと別れの手を振って船は川岸を離れた。赤土の土塀に囲まれた藁小屋の民家が印象的だった。

初めて踏む秘密の国だ、シベリア沿線のブラゴベシチェンスクの町はずれの川岸に糧秣を積み上げた。この日は午後から急に寒さが加わり、霰混じりの北風が大地に吹きつけていた。どこからともなく浮浪児風体

の子供が大勢集まってきた。皆はだしのままで。積み荷の周りにこぼれた大豆を生のまま食べてタバコを吸う真似をしてさかんに要求する。婦人は布切れ、生地ならどんなに小さい三角巾でも目の色を変えて欲しがった。日の丸の旗など日本の国旗とも知らず、赤の日の丸に目を光らせて要求をくりかえす。果ては目の前で平然とかつ払いが横行する。そのときは毛布などすばやく持ち逃げされた。

いかに戦時、共産主義下にあつて、戦闘に消耗したとはいえ、一般民衆の貧窮をわれら捕虜の身分に向かつて愁訴の場面に遭遇しようとは立場が反対である。世界最強の軍事国家を支えるため、国民の犠牲がこまで窮地に至っているとは思ってもみないことであつた。

ソ軍の指示する方向に徒歩で行進し、二キロ程先に行くのだという。目的地は町はずれの荒れ地で、各隊ごとに幕舎を張り、炊事、枯木拾い、水汲み、飯盒炊さんをし食事を取った。糧食運搬中に米を手に入れたので久しぶりに本物のご飯となつた。お菜の材料が無いので塩味となつたが大変美味しかった。

十月六日ブラゴベシチェンスクといえは沿線の中でも相当な町のはずだ。普通なら戦勝気分民衆喜々として活力を感じるものであるが、街は暗くくすぶっている。沈んだ街中に目立つものはスターリンの肖像画の大きな顔だけ。こうした町の民衆からは、長期にわたり深刻な物資欠乏は恒常化し、かっ払いは常套手段とみられ、どうみても長い間の窮乏生活が隠しきれないものが窺える。

夕方近くにシベリア鉄道の貨車に乗り込むことになった。シベリア鉄道は満鉄より更に広軌規格で、これが複線に敷設され、その輸送力は恐るべきものだった。貨車に乗り込む前に二食分の携行食とするようにと、糧秣配給と共に命令が出た。現場に大穴を掘り大釜を据えて、高粱・大豆・粟飯を飯盒に盛り分け各貨車ごとに分配した。

列車が東に進行すればウラジオストクを経て日本に帰ることができる。西に向かえばシベリアで作業と考えねばならぬ。夕暮れに近いころ乗車命令が出た。線路も広軌規格だけに箱も広い。四十六人満鉄貨車

よりゆったりとした、薪用ストーブも取り付けてあった。薪も積み込んだ。ソ連兵が警戒かたがた鉄の引扉を閉めに回ってきたころは真っ暗になっていた。しばらくして、ギーという鉄の鈍い音と共に列車が走り出した。暗闇の中ではあるが確実に西に向かって走っていることが確認された。内地帰還説の希望は消えて先に行きの不安は募り、沈黙のまま、車内に身体を横にした。浅い眠りの睡眠中に鉄路を走る貨車の響きが背中に伝わってくる。列車は夜通し走り続けた。

やがて朝がきた。用便のため小さな駅に停車した。駅舎というより黒くくすぶった板張りの山小屋で、駅らしい姿は何一つ見えない。ロシア語で簡単に何か書かれていた。続いて列車はシベリアの大森林地帯にさしかかる。やがてサバンナの平原が広がるが不毛の地である。高原、山地と平凡単調の連続で特に夜が長い。駅から駅に至るまで、灯り一つ見当らぬ漆黒の闇を一瀉千里人煙なしといった感じである。

十月二十九日を過ぎ、煙突が数本立ち黒煙が流れていた。初めて見る町である。貨車が駅に停車すると、

「全員下車」の命令。携帶品をとりまとめ車外に出る。到着したところはブリヤート自治共和国、バイカル湖南端より手前七〇〜八〇キロの所、ウランウデという工業都市という所であると後に知った。畑にはわずかなキャベツの残葉と、馬鈴薯を掘り返した畝間に豆粒大の收穫のあとが見えたのみである。

貨車から降り昼食の支度にかかる。布で顔を包んだ中東アジア系の顔をした女性が馬鈴薯、玉葱、キャベツ等の屑同様の物を売りに来る。出発から通して野菜不足に苦しみ続けていた我々は、その野菜を全部包帯と交換し、皮もむかず切り刻んで雑穀と一緒に塩粥にして食事を済ませた。かかる給与の劣悪さにだれもがこれからの先行きを心配した。

これから、いよいよ収容所入りであるが、入口前で身体検査が行われた。将校二人のうち一人は女性の軍医で、金髪の白系ロシア人らしかった。他に下士官二、兵数人、簡単な検査というより、各自携帶品の検査に重点がおかれていたが、実は下士官、兵は我々の万年筆、時計を取り上げるのに目の色を変えていた。後続

の仲間に無言の連絡を取り、それぞれ隠し持つことを工夫した。日の丸を見れば即座に目の前で焼き捨てる。日本人にとってこれ以上の屈辱はない。敗戦の憂き日が今更のように骨身にしみて無念であった。

収容所の建物は老朽した既設の木造二重張りの防寒構造で、平屋建てでも二階建てもあった。各部屋ごとにペチカ一個あて。わが収容所には約十人が収容された。各部屋の内部は、鉄パイプで天井高い部屋は三段階、普通のは二段階、丸太材をそのまま挽いたノタ付板を並べ、その上に日本軍が持ち込んだ毛布を一枚敷いただけ。一人割り当ての広さは、高さ一メートル、長さ二メートル、寝ては自分の肩幅よりやや広い程度で、「座して半畳、寝て一畳、五尺の体置場なし」といった、蚕棚ならぬ人間棚といった処遇であった。

収容所の外周を高い板塀で囲み、その上に四本の有刺鉄線を張り、板塀の内側と外側に三重の鉄条網を張りめぐらし、四隅に丸太材の高檣の見張り小屋に実弾装填・着剣の警戒兵が昼夜交替で嚴重警戒に当たる。夜は時折逃亡者防止の威嚇発砲をする。特にこの発砲

が上からの命令によるものであるということが判るのは、紀元節二月十一日、天長節四月二十九日、明治節十一月三日、これには夜になると発砲回数も多く、暴動鎮圧を目的としての発砲であることが後日になって分かった。

わが収容所を受け持つソ軍作業割当本部（シタープ）の長は陸軍大尉（カピタン）であった。

朝七時整列、作業命令が出る。いよいよ、これから何年続くか判らぬ強制労働の始まり。

十一月十五日作業命令、作業現場も仕事の内容も何の連絡もないまま朝七時作業整列の命令が出る。幸いわが方にはハルビン学院卒業のロシア語に堪能な下士官の二人が早速ソ軍本部へ出向、次のことを打ち合わせた。

就労現場は何カ所か、一カ所の事業所に何人を送るか、作業交替は何時になるのか、当方は約千人であるが満州出發以来劣悪な貨車輸送と粗悪な食事によって、大勢の病人がおり、他に炊事要員、作業割当本部事務要員等々を差し引くと可動人員は八百五十人であると

説明したところ、ソ軍側には作業計画に基づく割当といったものはないまま、ただ全員、整列の命令が出されただけであった。

そこで折衝の結果、就労現場は次のようであった。

① シベリア鉄道の枕木の取り替え

② 機械工場運搬作業

③ 火力発電所の石炭降ろし並びに運搬

④ 製材工場工員以上四カ所、三交替

と決まった。朝番出勤者二百七十人、夜勤上番下番者二百六十五人あて、こんなことの折衝でなかなか難しく終日を要した。

翌朝七時、作業整列。北極の雪原より吹き抜けてくる寒風は旧日本軍の常用外套と通常編上靴では底からじかに冷たさが伝わってくる。足踏みをして耐えるより仕方がなかった。一個小隊ごとに警戒兵二人あて、出發に際し人員点呼に大変手間どる。見ると一〇以上の数は無理なようだ。まして九九暗算等全然判っていない。何度も元へ戻って数え直しても確実な端数の掌握ができないまま出發となる。取り上げた腕時計の時

間も分らず猫に小判といった愚かさぶりであるが、威張ることにかけては陸軍大将並みで大変始末が悪い。

徒歩で現場に向かう。現場では作業監督の指示に従う。作業用スコップが馬鹿でかく、部厚い鉄板製で片減りも甚だしい年代物で、昔に廢品処分物である。何かから今までお粗末様で驚くばかりであった。貨車ごとに人員を決めノルマを課して作業能率アップが喧しい。昼が来ても暖かくなってこない。厳寒のまま。昼食のパンは朝が少ないので半分以上食べた残りを水を飲みながら食べて、一時間の休みを過ごした。毎日のことだが午後の時間の経つのが非常に長く、作業終了が待ち遠しい。皆防寒帽の帽垂れを降ろし、肩を落とした後ろ姿が淋しい。すべての自由を剝奪され、虜囚の束縛にやつれた憂き身を親しい人にほど見られたくなかった。

やっとのこと四時のサイレンが鳴ると同時に、残余の仕事に「ダワイ、ダワイ」の怒号がかかる。疲れ果てて収容所に帰っても風呂もなく、垢と埃にまみれ、着の身着の儘で粗食を摂る。話題はきままって食べ物の

話になり、かつて田舎の味を思いだし、ボタ餅、大福餅、鯉、鰻、はては五平餅、お雑煮等々の話で空腹を満たす。ことの詮なきことを分かっているながら、画餅の話を繰り返しながら、せめて今の給食の倍は欲しいと嘆息を洩らす。

不衛生と劣悪な衣食住の上に、重労働のためシラミの大発生となり、下着の縫い目の裏側にぞくぞくするほど湧き、その上に壁の隙間から南京虫との連合軍がやせ衰えた兵をめぐって夜襲攻撃の連夜に全く閉口致し、いかにも耐え難い苦しみであった。ぼりぼりと掻いて体に疵痕が残痕となる。電気をつけて見るが南京虫の逃げ足の早さは魔物並みであった。首尾よく潰すといやな強い臭いが残る。

ソ軍側も南京虫については馬耳東風であったが、シラミは発疹チフスの伝染病を媒介するため、これが民間に伝染するのを恐れて神経をつかった。そのお陰で入ソ以来初めてサウナ風呂に行けることになった。徒歩で一・五キロほどの所であった。一回に四百人以上入ることが出来るソ連にしては珍しい施設であると思っ

た。

実は国内にチフスが蔓延することを恐れてのシラミ退治の施設であることが分かった。衣類は全部名前を付けてスチーム室で百度以上の熱で滅菌する。シラミは真っ白くなって完全に死んでいた。まる三カ月ぶりのことであり、垢が厚くなって首筋や横腹には黒い雲が瘧のようになった。中は猛烈な高温のサウナ風呂で、室内に六〇七分も座ると汗だくになる。垢が厚くなつて垢の皮剥ぎといったところだ。何度も何度も皮剥ぎをしたがいくらでも出た。身体が軽々として爽快な人間の気持ちを取り戻したようだ。その夜は体の痒いのもとれてぐっすりと安眠できた。

入国後四カ月も過ぎて、越冬一年目の本格的な酷暑期の到来となる。中でも一月〇二月の厳寒期は零下四十〇五十度以下に下がる。この時期には空気も凍ることもしばしばであった。この寒気はどのように表現しようとも、表現し難く、日が昇ってくる一時間ほど前が最高の寒波が襲ってくる。このときは作業も出来ない。足踏み小踊りをして凌ぐが、特に気をつけないと

鼻がローソクのように白くなるとこれは大変にまずい。やむなく民家に頼んで廊下に這わらせてもらう。これをこすると一遍に皮がむけて火傷と同じように後口まで残痕となる。

こんな時にもロシアの警戒兵は自分だけ焚火で暖をとり、何ら処置も感情も示さない。武士の情けもない、敵に塩の慈悲もない、冷血の生きた人間の化石としか見えなかった。シベリアの一月〇二月の厳寒時に耐える防寒服の備えもない。加えて粗食の上に量が少ない。わが収容所においても栄養失調症の患者が百五十人に及んだ。これがもともになり急に亡くなる者は必ずと言っていいほど急性肺炎を併発して、一万キロ近くも隔てた異国の地に、肉親の顔も見られず憐れな臨終の現実はどうしてやることもできない。服を着たまま送別したいのだが、被服が不足するためにそれも叶わず、凍土のため埋葬もできない。裸のまま廊下に積み上げ、凍土の解ける時期まで待つことを余儀なくされた。

私は満州新京以来、大隊本部に勤務したのでそのまま収容所本部におり、庶務の仕事にあたっていた関係

から、あまりにもひどいこの惨状について待遇改善方に通訳と共にソ軍本部に向向して懇願をした。けれども何の措置もなされないまま終わった。それどころかソ軍本部の下士官の一人が、「貴様ら日本人は捕虜ではないか、大至急仕事をしろ」と大罵声を発した。この人非人の冷言に巡り合わせた運命の残酷として諦める訳にはいかなかった。

その後、ソ軍将校をはじめ女性将校、看護婦、下士官、兵、民間人など作業を通じ接触するうちにソ連の内実が少しずつではあるが分かってきた。よく考えてみれば先の下士官も彼一人が悪い訳ではない。あの冷酷無比な発言といい、典型的独裁政治からくる命令の故である。妥協を許さぬ恐るべき独裁だ。このような無情の世界にあっても彼等はインターナショナルを謳歌し、働く者の味方の国だ。社会主義、平和の国であるなどなど聴くもいやになるほど口々に主張する。どうやら民主主義の語義を全く解していないらしい。しからばその実態はどうかと一般民衆に目を向ければ、全くといってよいほど正反対である。一般労働者階級

は最低の生活を強いられている。実に惨めである。

かねて日本の徳川時代における厳しい階級制度によって人間を差別し、雁字搦めの法令を天下して過酷な年貢を取り立て、百姓と菜種油は搾れば搾るほど出るといった悪政に、所詮水呑み百姓の域を出ることが出来なかった。こんなことが今日只今のソ連の国にあって、思ってもみない前時代的社会的現実を見ることができたと私は感じたのである。

思想洗脳教育も抑留者の義務の一つであった。月に三回の日曜日を休むことになり、一番嬉しかった。

少量ながら石鹼の配給もたまにあったので、湯を沸かして洗濯ができる。手袋被服の繕いもできた。こうしたことに大変忙しい最中に、中庭整列の号令がかかると。知らぬ間にソ連共産党党员等と連絡済みであった。わが収容所からも運動員が三人ほど洗脳教育運動に参加して民主化運動が活発に行われた。天皇制を批判し、社会民主主義を説き、大演説を展開する。更に進んで他の収容所へも遊説に出かける者もいた。

本人の真偽のほどは分からぬが、朱に交われば赤く

なるのか結構わが方にも賛成の赤鬼青鬼がぼつぼつ出始めた。当方の心底はどのようにあるうともダモイ（帰国）促進に役立つならと、礼賛の拍手を送る。内心は天馬空を翔けて思いは遠く故郷にあり、帰心矢の如しとはこのことだと思った。日本人はそれほど馬鹿ではないが、早く帰るための方便と心の中で思い教育を受けるが、ソ連の尻馬に乗って、戦友を裏切った者も若干あった。

このように抑留生活というより、国際法無視の強制労働のため、六万人近くの日本軍人、軍属がシベリアの地で亡くなったのである。我々は、このシベリアでの抑留期間に生き抜き帰り得たのであるが、この数年間に、スターリンの独裁政治のもと、その被害者は我々のみでなく、実はソ連国民であることを知ることができた。